資料７

第２期中期目標期間（令和元年度～令和６年度）における業務実績見込みに関する評価意見【全体評価】

業務実績全体についての意見等は、次のとおりです。

【第２期中期目標期間（令和元年度～令和６年度）における業務実績見込みに関する評価について】
（全般的事項、特筆すべき成果、今後に対する意見等）
■花泉委員長
③学科再編に伴うカリキュラムの検討や新しい人計画の策定など、一時的に先送りとされてＣ評価になった項目については、令和４年度までには実施済となっている。今後２年間で確実に定着し、目に見える形での成果に繋がっていくことを期待したい。
コロナ禍の影響で一時的にＣ評価となっていた項目についても、今後２年間で後れを取り戻しつつ、さらに実質的な成果があがるよう取り組みを発展させてほしい。

■後藤委員
（全般的事項、特筆すべき成果、今後に対する意見等）
①第２期中期目標期間（R1～R6 年度）における４年間（R1～R４年度）の総括評価結果は、年度計画を上回って実施している（Ａ評価）が４．９％、年度計画を計画どおりに実施している（Ｂ評価）が９２．１％となっています。Ａ評価とＢ評価の合計が全体の９７％という結果は、４年間の年度計画を順調に推進していることを示しており、高く評価できます。④R1～R3 年度に生じた年度計画をやや遅れて実施している（Ｃ評価）は、先送りしたものは、全て令和３年度までに実施済であり、また、コロナによる中止のものは、令和４年度から徐々に取り組みを開始できています。そのため、第２期中期計画は、おおむね計画どおりに達成できる目途がたっており、評価できます。
研究活動について、⑫産官学連携コーディネーターを中心に、関係機関や企業との連携を強化したとこで、Ｒ４年度では市内・県内企業だけでなく県外企業を含めた共同研究実施件数が前年度と比較して１７件増加したことは評価できます。一方で、中期目標の地域貢献における数値指標は、市内・県内企業で３０件以上としており、Ｒ４年度においても２４件に留まり達成できていないことに留意が必要だと考えます。
⑨また、研究成果の社会への還元を目的に、論文投稿数が前年度と比較して２割増加し、論文掲載数についても、前年度の７９編よりも６編増加し、８５編となったことは、研究発表の量的増加だけでなく、質的向上も示しており、高く評価できます。中期目標の研究に関する数値目標の一つは、学術団体論文誌等への論文掲載数を累計で４２０編以上としていますが、Ｒ４年度までの４年間で順調に掲載数を増加させており、これまでの平均７４編をＲ６年度までの２年間で積

み上げることができれば、数値目標を達成できる状況になっていることも評価に値します。

⑮また、ソーシャルデザイン研究センター及びバイオサイエンス研究センターを新たに設置し、地域貢献、研究及び産学連携活動を包括的に行うための組織として活動を開始できたことは高く評価できます。Ｒ５年度には、二つのセンターの趣旨を実現するための公募型共同研究の募集が開始されており、高い専門性を活かし地域社会をはじめ社会全体に貢献できる研究が促進されることを期待します。

■石井委員

（全般的事項、特筆すべき成果、今後に対する意見等）

⑤業務実績の補足事項を拝見すると前年比を全体的に上回り、計画通りに実績を残しているのかなと思いました。

■伊藤委員

（全般的事項）

中期計画と現時点までの実績を検討した結果、全体として、概ね適正に評価が行われていると判断します。また、②第２期中期目標期間のうち、４年間の年度計画の総括結果として、９７%の項目がＡ評価もしくはＢ評価となっており、年度計画は概ね順調に推移していることから、対応する中期計画に関しても概ね計画通りに着実に実行していると判断します。

（特筆すべき成果）

⑥この期間には新型コロナウイルスが流行し、従来の授業の在り方や大学の運営方法を大きく変更せざるを得えない、非常に大変な期間もありましたが、その中でも、試行錯誤しながら柔軟に対応することで、計画を概ね順調に達成してこられたことは、大学の努力の成果であり、高く評価できる点だと思います。

⑩また、この４年間（特に令和４年度）で、論文投稿数・掲載数が大きく増加している点、共同研究の実施件数や科研費の採択件数が増加している点は、高く評価できると考えます。組織的に教員に対する研究への意識改革に努めたことや、対外的なＰＲ活動を積極的に実施した成果であると思いますが、今後も引き続き研究に対する大学の積極的な取組みが行われることを期待します。

（今後に対する意見）

⑧中期計画における数値目標は、必ず達成すべき目標として大学が力を入れて取り組んでいる項目という理解ですが、このうち、４項目が現時点で目標未達となっております。そのため、当該項目に関しては、数値目標の達成に向けた具体的な取組みを今後２年間で確実に実行されていくことを期待します。

そのうち、⑪「（２）地域貢献に関する事業への学生の参加数」については、目標値２００人以上のところ、令和元年度は２５４人と目標値を超えておりますが、

令和２～４年度は新型コロナによる活動自粛等の影響により、いずれも３０人程度の参加数となっており、目標値を大幅に未達の状況となっており、達成が懸念されます。要因としては、新型コロナというやむを得ない要因によるものではありますが、一方で、令和５年度からは新型コロナによる活動自粛等も社会的に終息し、新型コロナ前の状況に戻ってきていることから、徐々に状況は回復していくことが予想されます。そのため、今後の２年間では目標値を達成するための機会を作ることは可能になってくると思います。新型コロナに対する捉え方は人それぞれであるため難しい面はあるかと思いますが、目標値達成に向けた対応策を策定する等、取組みを強化していく必要はあると考えます。

■小島委員
意見なし

■高山委員
⑦コロナ禍の影響によって「Ｃ」評価とせざるをえなかった項目について、業務実績が改善されつつあり、目標終了時での目標は達成できると考える。
学年進行中の学科改組にかかる業務実績については、学科改組に伴う課題の把握と改善に努めていただきたい。